



タッチからタッチングへ

廣瀬 浩二郎

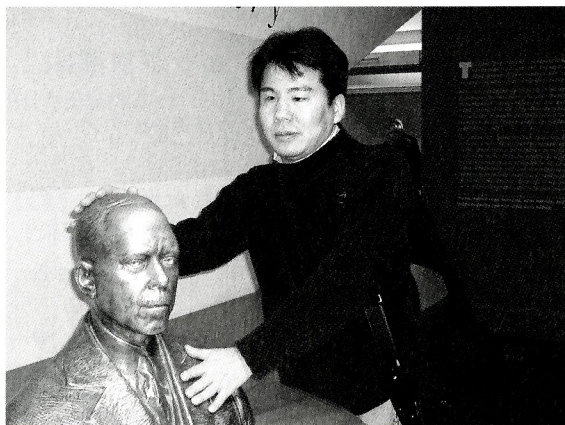
(ひろせ こうじろう)

本館民族文化研究部

美術館の「さわる絵」

暖冬といわれた今冬だが、さすがに二月のシカゴは寒い。寒いというより痛い風を肌で感じるのも異文化体験だと思いつつも「百聞は一触に如かず」精神でシカゴにタッチする(さわる)フィールドワークを楽しんだ。今回は二週間のアメリカ出張だったが、各地でタッチング(感動的な経験をすることができた。僕がシカゴに到着したのは、シカゴ・ヘアーズがスーパーボウルで敗退した直後。スーパーボウル当日は、相手チームのタッチダウンに悔し涙を流すファンも多く、大荒れの街であったそうだが、滞在中は折からの寒さもあつてか、静かな大都市という雰囲気だった。

僕が最初に訪ねたのは、全米でも有数のコレクションをもつシカゴ美術館。事前に依頼していた職員の家内で、展示物にさわる「タッチ・ツアー」を満喫した。さわることでできない絵画作品をどうやって視覚障害者に伝えるか。これは永遠の課題だし、日本でも近年いろいろな実験が試みられている。シカゴ美術館では各ギャラリーから代表的な絵画を選定し、それを凹凸化した「さわる絵」を用意していた。ガイドの解説を聞きながら「さわる絵」に触れると、想像力の乏しい僕もなんとなく作品の全体像をイメージすることができた。じつは、この「なんとなく」は重



「タッチ・ギャラリー」は小規模だが、各展示物には点字キャプションも付けられている

要で、「目が見えない」絵は楽しめない」という常識を打破するために、これからも斬新な発想で「なんとなく」頑張りたいものだ。

「タッチ・ギャラリー」

なんとなく絵画を味わうのも悪くないが、触覚の本領が発揮されるのは、やはり彫刻などの立体物の触察、触学だろう。シカゴ美術館には銅と大理石製の胸像を手

で触れて鑑賞できる「タッチ・ギャラリー」があり、視覚障害の有無にかかわらず、すべての来館者にタッチングな触文化体験を奨励している。僕が訪れた日も、多くの子どもたちが展示物にさわって喜んでいった。日本でも彫刻作品にさわられる美術館が増えているが、アメリカを代表する大美術館に堂々と「タッチ・ギャラリー」が設置されているのには驚いた。

ギャラリーの解説パネルは、次の文言で始まっている。「このギャラリーは、『手で触れる』という行為が芸術鑑賞をいかに豊かにするものか、来館者に経験してもらおう貴重なチャンスを提供します。触れることを通じて、人は芸術作品を形や線、サイズやスタイル、温度、素材といったもので識別できるようになります。それらは視覚だけでは感じることでできないものです」。

さて、今回の出張のメイン・イベントはシカゴ大学での講演。「The Richness of Touch」の演題で、昨年おこなった民博の企画展「さわる文字、さわる世界」の内容について、いつものブロークン英語で報告した。僕の話が大学のスタッフ、学生にとってタッチングなものだったかどうかはさておき、たくさんの方と出会った。そんな新しい友人と「Deep Touch」(またねと握手を交わし、僕は痛いシカゴを後にしたのだ)。